

アパートへ帰り、着替えをし、遅い昼食をおじさんの処で済ませ、部屋でうたた寝をしていた。背中にぞくぞくとした悪寒が走り目が覚め、時計を見ると午後の3時を回っていた。このままぼんやりしていると、風邪を引きそうなので、とりあえず外に出て何かをしようと思った。鉄製の外階段を降りながら、無性に明美に会いたくなかった。僕は明美のアパートまで足早に歩き、

「明美さんいる？僕です。伊達です。」

とノックしながら大きめの声で呼んだ。

「ああ、伊達君、ちょっと待って。」

ドア越しに懐かしくさえ思える明美の声がした。ドアが開けられ上がろうとすると、

「今日は帰んなさい。」

と、突っぱねるように明美が言った。

「何故？誰かいるの？」

「いやあね。誰もいないわよ。それよりね、今度の日曜日デートしない？」

「デート？」

「そうよ、デートよ。今まで君とした事ないでしょう。今度君が来たら言おうと思ってたの。」

「いいね。面白いね。で、何処へ行く？」

「君自分で考えなさいよ。」

「うん……豊島園なんかどう？」

「いいわね。君に任せるよ。しっかり考えておくのよ。」

「じゃ、日曜日11時、池袋の改札口。で、どう？」

「馬鹿ね。豊島園に行くんだったら、わざわざ池袋まで行かなくてもいいじゃない。」

「僕に任せるって言っただろう。それに、その日までに気が変わるかもしれないし、11時だよ。起きれる？遅れないでよ。じゃ、帰る。」

僕は今、10時50分、池袋の改札口の柱にもたれて明美を待っている。(多分遅れるだろうな。派手な服を着てくるんじゃないかな。化粧は少し控え目にしてきて欲しいなあ。お金は僕が払うのかな、そうしたら6千円位しかないのでどうしよう。)などと思っていると、僕の目の前に見た事もない女性がやって来て、

「やあ、待った？ぴったりでしょう、11時。」

「……………」

「やあね、あたし、明美よ、伊達君。」

「えっ！明美さん！うそ、全く見違いちゃった。本当だ、明美さんだ。」

「どう？女子大生に見える？」

化粧は口紅くらいしかしてない感じだったし、長くて染めていた枝毛の多い髪は、肩のあたりできれいに切り揃えてあり、君が緑の黒髪、とまではいかななくても、充分黒髪だし、着ている服は、サーモンピンクのクロコダイルのスポーツウェアで、膝が少し見えるくらいの丈のスカートは薄い紺色、ストッキングも白の網の目になったものだった。マニキュアは、透明に近いピンクで、爪も短く切っていた。

「切符買ってくる。」

僕は相当張り切っていた。定期券があるのも忘れて、豊島園まで二枚買った。着くと家族連れとかカップルが大半だったが、何組かは女同士、男同士のグループもいた。僕達は彼らの嫉妬深い視線を楽しみながら、腕を組んで列の中に並んで、いろいろな乗り物に乗った。明美が気に入ったのは、当時としては珍しかったジェットコースターだった。暗闇を出入りしたり、水しぶきを

上げたり、垂直に落ちるのかと思われるような、上下動を繰り返している間中、明美はキャアキャアとはしゃぎながら、僕の腕にしがみついていた。僕はというと、もう目をつぶりっぱなしだった。明美はもう一度乗りたいと言ったが、本当は僕は怖かったのだが、待つのが嫌だと言った。ソフトクリームを食べたり、スパゲッティを食べたり、コーラを飲んだりして、あっと言う間に夕方近くになった。

「ねえ、これからどうするの？」

と明美が聞いた。

「別に何も考えてないんだ。どうする？」

「新宿へ行かない？ ゴーゴーでも踊りに。」

「うん、いいよ。僕は行ったことはないが、明美さんさえよければ。」

と云うことになり、ゴーゴー喫茶（決してディスコではない）へ行くはめになった。

新宿駅の近くで軽い食事を取り、明美のエスコートに従いゴーゴー喫茶に着いた。入り口でチケットを2枚買い1600円払った。その頃から、けたたましい音は聞こえていたが、室内はもう僕にとっては騒音以外の何物でもなかった。ボーイが、飲み物は何にするのかと大声で尋ねた。勝手に解らない僕は、明美の方を見た。明美はジントニック、と言ったので、僕も同じ物を頼んだ。ジントニックと云う知らない飲み物が運ばれてきたので、口にしてみたが松脂の様な味がした。まだ時間が早いせいもあったのか、店内には20人位の若者がいて、そのうちの半分程が手足を器用に動かして踊っていた。松脂を舐めながら僕は煙草に火を点けた。（いつ出て行こう）そればかり考えながら。

「ねえ、踊らない？」

「僕は知らないから、いいよ。どうぞ。」

「簡単じゃない。リズムに合わせて、体を動かせばいいんだから。行こうよ。」

「いいよ、少し見てるよ。」

明美は群れの中へ入り、知らない若者としゃべりながら、腰や腕を振っていた。（ちっとも色っぽくない）30分程して明美は「ああ、疲れた。」

と言って、やっと僕のところへ帰ってきた。残った松脂を一気に飲み干し、

「行こうよ、教えてあげるから、ね。」

と、僕の腕を引っ張って群れの中へ連れていった。得意の居直りしか僕には残されていなかった。

「上手じゃん。そうそう腰はこういうふうに、腕はこうね。足はそれに合わせて、自分の感じるままにやればいいのよ。格好つけないで。」

怒鳴るように、ゴーゴーの先生はのたまう。僕は疲れたので壁にもたれて、少し休んでいると、

「今度は誰でも出来るよ。おいで。」

と、僕を誘った。騒音は急にスローなテンポに変わった。

「チークなのよ。ラストの頃になるともっと凄いよ。ほとんどキスをしてるわ。」

明美は、僕の首に両腕を巻きつけた。僕も回りを見習って、明美の腰に両手を回した。

「あっ！大きくなった！」

「バカァ」

僕は明美のおでこにキスをした。何組かのカップルは、唇を重ね、目をつむり、全く動かない状態になっていた。スポットライトが乱舞しだし、元の騒音に変わった。僕達も離れテーブルに戻った。明美はボーイを呼び、レスカを二つ頼んだ。

ゴーゴー喫茶を出たのは、9時を過ぎていた。明美は小さな声で、

「ねえ、ホテルへ行かない？」

「ホテル？」

「あれよ、あそこ。」

見上げると、怪しげな色でクィーンと描いてある、ネオンサインが目映った。明美は僕の左腕にぶら下がるようにしていた。明美の頬にネオンサインの灯りが反射した。僕の胸は万引きする瞬間のような緊張感で、ドキドキしていた。ドアは自動になっており、入ると胡散臭そうな目付きをしたおばさんがいて、部屋まで案内された。部屋の壁の色は赤紫色で、ほの暗い照明は、陰湿な雰囲気をかもし出していた。おばさんは、[ごゆっくり]と言い、舐め回すように僕達を見ながら、テーブルにお茶を出した。襖を開けると、布団が二組み敷かれていた。上布団は、朱色の品のない柄で、敷布団は僕のよりもひどいせんべい布団のような気がした。

「お風呂に入る？それともシャワー？」

「シャワーでいいよ。」

「じゃ先にシャワー浴びてくるね。」

手慣れた感じで事を進める明美に、嫉妬を覚えた。僕は段々サディスティックになってきた。僕は明美を追うように裸になり、浴室へ駆け込んだ。シャワーをしている明美を後ろから羽交い締めのような格好で抱き締め、激しく唇を吸った。体も拭かず、シャワーも止めず、そのまま明美を抱きかかえ、布団の上へ押し倒した。いつになく激しく時が流れた。明美は裸のまま煙草を取りに行った。うつ伏せになり、火を点けた。一本を僕に渡し、明美も煙草に火を点けた。

「ねえ、伊達君。もし私が居なくなったらどうする？」

と呟いた。

「必死に探すよ。」

「嘘！」

僕の言ったことが嘘なのか、居なくなるのが嘘なのか、僕は解らなかったし、詮索もしなかった。

「明美さん、ここの払いくらぐらいかな？」

と僕が言うと、

「これで払っときなさい。」

と言ってバックから壱万円札を出し、僕に渡した。それから一時間ほどして、受付で支払いを済ませ、

「これ、お釣。」

と返そうとすると、

「いいわよ。デート代の足しにしときなさい。」

と受け取らなかった。明美との最初の、しかも最後になってしまったデートは終わった。